

生涯学習におけるシニア大学生の学びのニーズ ー神戸山手大学のシニア学生を対象にした調査結果からー

A Study on Senior (the Third Age) Students about Lifelong Learning : a Case Study of Kobe Yamate Univ.

飯 嶋 香 織 ・ 行 木 敬

キーワード：シニア層 生涯学習 大学開放 神戸山手大学

1 はじめに

神戸山手大学では、50歳以上の学生を正規の学生として入学するシニア50+（シニア・フィフティ・プラス）制度を2009年にスタートさせた。本制度の導入から6年が経過し、2013年3月には2期目の卒業生を送り出し、この4月は6期生となる9名の新入生を迎えた。本論文は、6年目を迎えたこのシニア50+制度の現状と意義を考察するものである。

神戸山手大学現代社会学部は、社会学・メディアフィールド、心理学フィールド、経済・経営学フィールド、観光学フィールド、環境学フィールド、建築・インテリアフィールドの6フィールドからなる文系中心の小規模大学である。

神戸山手大学に入学したシニア学生は、1年次の基礎ゼミナールをシニア学生だけのクラスで受講する以外は、語学、ゼミなども含めすべての科目を一般の学生とともに受講し、卒業時には学士の学位を取得できる正規のコースである。さらにシニア学生の一部は、一般の学生とともに華道部や茶道部などの課外活動にも積極的に参加している。

入学者数は、1期生（2009年入学）13名、2期生17名、3期生7名、4期生7名、5期生10名、6期生9名である。年によって変動があるが、シニア学生数だけで全学生の約1割弱を占めている。

シニア50+制度は、入学時年齢は50歳以上の方を対象にしている。これは本制度の創設に関わった神戸山手大学教授福原（2008）の考えによる。団塊世代の定年退職者を対象とすると60才以上となるが、それでは団塊世代が去った後は制度の継続が難しくなること、また当該世代の女性には専業主婦も多く、定年退職者という男性中心の発想だけではなく、むしろ生涯教育という観点から生活に一区切りがつき人生を改めて考える世代を対象とするならば、子育ての終わった50歳以上を対象とすべきだと考えたのである。

入学選考は、志望者のニーズと本学の教育内容に齟齬をきたさないこと、また本学のシニア50+制度を志望者に理解していただくためにAO方式とし、事前の面談にも力を入れている。学費等の

納入金については奨学金がある。納入金のうち40万円分が返済不要の奨学金として減免されており、シニア層にとって入学しやすい条件整備がなされている。

当初は、団塊の世代の定年退職者や子育てが一段落したシニア層を入学者として想定していたが、福原(2008)も指摘しているように実際に入学したシニア学生は多様であった。年齢も20歳以上の開きがあり、学歴も高卒、短大卒、四大卒、大学院修了と多様であった。職歴も様々であり、入学時の状況も定年退職者だけでなく、中途退職者も、在職のままの方もいた。

2 研究の背景

1) 生涯学習の視点から

シニア学生が大学で学ぶ意義は、まず生涯学習の視点から考察することができる。文部科学省(超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会)、2012『長寿社会における生涯学習の在り方について～人生100年いくつになっても学ぶ幸せ「幸齢社会」～』では、人生100年時代の到来の中での生涯学習の在り方を検討している。そこでは、「高齢社会」という言葉の持つマイナスのイメージから脱却し、健康で、生きがいをもった高齢期を迎えるためには、人生100年時代を想定した人生設計を行う必要があること、また高齢者の実態とイメージは乖離しており、社会から支えられる存在ではなく、地域が抱える課題を解決する「地域社会の主役」として活躍できる環境を整備することが必要であるとしている。そして、生涯学習の役割は幸せな人生を支える社会保障であるとして、その具体的な内容として、生きがいの創出、健康維持・介護予防、絆の構築による孤立化の防止、地域社会の活性化、世代間交流(家庭支援など)をあげている。

また佐藤(2006)は、超高齢化社会を実現しつつあるわが国では「退職＝老後」と捉える考え方が急速に減少していること、団塊世代の定年を「第2の人生」から「新たな出発」と捉える意識の転換がなされていること、何らかの疾病や障害を得る者が大部分となる第4年代(85歳以上)の前の第3世代であること^(注1)、そしてこの第3世代は、会社組織などの束縛を受けない自由な立場で個人としての生きがいを実現するために生きるという意味で、新たな世代の誕生であるとしている。この第3世代は、健康で自立し、生産や社会貢献も可能であるという。

注1 佐藤(2006)は、親の庇護の下に生活を送る児童・青年期を第1年代、親から独立し社会的責任を担って自立する成人世代を第2年代としている。

2) シニア層にとっての学びの意義

シニア学生が大学で学ぶ意義については、生涯学習という社会的要請を背景としたマクロな視点からの考察だけではなく、個々のシニア学生にとって学びがいかなる意義を持つものなのかを明らかにするミクロな視点からの考察も必要だろう。たとえば前述の文部科学省『長寿社会における生涯学習の在り方について』に列挙された生涯学習の役割——生きがいの創出、健康維持・介護予防、孤立化の防止などは、具体的に個々のシニア学生の側からはどのように実現されているのか(あるいはされていないのか)についての調査・研究である。

本研究で得られた知見を先に述べるならば、まず「生きがいの創出」については、本学での学びがひとつの意義を持っていることは指摘できそうである。正規学生として毎日授業を受け、期末試験やレポート、ゼミ活動に挑む（もちろん成績次第では単位を落とす）という本学での学習環境について、今回聞き取りを行ったシニア学生たちは、異口同音にこれを負担ではなく「挑戦すべき目標」ととらえ、同時にそれを乗り越える達成感や充足感を語っていた。大学生活の中でしか得られないこの前向きな活力は「生きがいの創出」と呼んで差支えないものだろう。

「絆の構築による孤立化の防止」や「世代間交流」についても同様である。後述するように本学のシニア学生は、互いをライバルとして勉学に励む一方、一緒に食事に行ったり旅行に行ったりと、良い友人関係も築いている。孤立化どころか、「大学に来なければ出会えなかったような様々な経歴や年齢の人」との交流を、みな楽しんでいるようである。若い学生とも、ゼミや授業、クラブ活動など様々な場で、盛んに、また自然に交流が重ねられている。18歳から23、4歳位までの同世代の若者だけで構成された大学とは違い、社会経験のあるシニア層と一緒に学ぶことができる神戸山手大学の環境は、若い学生にとっても、シニア層にとっても意義のあるものになっていると思われる。

「健康維持・介護予防」については本研究では取り扱っていないが、社会参加がシニア層の健康促進に一定の効果を持っているとする研究はある。たとえば三徳（2006）は、健康構成要因の影響関係は「社会参加」をすることで「活動（生活能力）」が活性化し、「心身機能（一病息災的健康）」が高まるという影響方向にあったことを指摘している。

「地域社会の活性化」について、本研究では紙数の都合から詳しくは触れていないが、本学を卒業したシニア学生の中には、地域の高齢者を支援するビジネス（「住まい・環境相談室」）を共同ではじめた方たちがいるし、他にもそのような地域社会への貢献を卒業後に考えているシニア学生が多いことは強調しておきたい。生涯学習の理念を示した教育基本法第3条に「（前略）その成果を適切に生かすことのできる社会の実現が図られなければならない」とあるように、学んだ成果を生かすことは第3世代のシニア学生にとって、またシニア学生を抱える本学にとって、きわめて重要な課題である。

3) シニア層への大学開放の2つのパターン

シニア層への大学開放について、堀（2011）は、2つの対比的なシニア向け大学開放の事例として、分離型の事例として園田学園女子大学を、統合型の事例として神戸山手大学をとりあげている。分離型の事例（園田学園女子大学）では、生涯学習センターが中心となり、シニア専修コースでコース専用設置された科目で学び、正規学生として一般学生とともに学ぶシステムではない。この分離型の事例は、関西に限らず、関東では立教大学の「立教セカンドステージ大学」などの事例がある。この分離型は、多くの大学で実施されている大学の生涯学習講座の延長上にあるものという見方をすることできよう。

それに対して統合型の神戸山手大学では、50歳以上の「シニア学生」は正規の大学生であり、すべての授業、ゼミ、さらに課外活動までも一般学生とともに学ぶ先進的な取り組みであるとされて

いる。こうした統合型は、関西国際大学等でも60歳以上のシニア学生を対象に実施されている。

3 研究の方法と視点

本研究は、シニア学生（在學生3名と卒業生2名）への聞き取り調査を主軸に構成される。一般学生とは異なるシニア学生ならではの事情を明らかにするため、本研究は特に二つの視点から研究を進めた。

第一は、大学入学を考えた志望動機など、大学入学前の状況についての聞き取りである。大学入学にあたって阻害要因があったならそれをどのようにクリアしたか、またシニア層への大学開放の二つの型のうち、分離型ではなく統合型である神戸山手大学を選択したのはなぜか等についても聞き取りを行った。

第二は、学校生活に対する満足度など、大学入学後の状況についての聞き取りである。大学での学びによって生活満足度は全体として向上しているのかについても、この聞き取りから明らかにしていきたい。

また、大学で学んだことを活かし、卒業後何らかの社会貢献活動をしたいというのは、後述する通り多くのシニア学生の希望である。そのため今回の聞き取りには、在校生だけでなく、卒業生も対象に含めることで、大学での学びと卒業後の活動が、実際どのようなかたちをとっているのかを明らかにしようとした。表1に示す通り、この二名の卒業生は、大学で学んだ建築学や環境学の知識を活かし、地域の高齢者から住環境に関する相談を受けたり、住環境整備の手助けをしたりする「住まい・環境相談室」を立ち上げている。

1) 志望動機、および阻害要因のクリアー

「1. はじめに」でも述べたように、シニア学生は、年齢においても経歴においても入学時の状況においても多様である。志望動機についても、福原(2008)は、神戸山手大学1期生と2期生を対象に調査した結果、志望動機は学問志向と教養志向の2つに分けられ、人数はほぼ同数であるとしている。

正規学生として一般学生とともに学ぶ神戸山手大学に入学することは、週2、3回の講座に通う場合とは異なり、時間的、経済的にも負担が大きいと考えられる。神戸山手大学に入学したシニア学生はなぜそういった学びを選択したのか、その理由を明らかにする必要がある。

また、シニア層が正規学生として大学に通うことには、一般の学生とは異なる種類の不安や困難が伴うはずである。この点については出相(2009)の調査がある。出相は、市民大学を受講しているシニア層を対象に、正規学生として大学に進学する意志の有無を問い、進学の意志がある者については、現在それを躊躇させている理由をたずねる質問紙調査を行った。その結果、大学進学を阻む要因としては、経済的要因のほかにも、「入学するには年をとりすぎている」「若い学生とは競い合えそうにない」「体力や健康面で不安」「卒業までに時間がかかりすぎる」といった、年齢や健康

面での不安が多く挙げられた。

ならば、実際に本学に学生として入学した学生は、こういった阻害要因をどのように考え、クリアしてきたのだろうか。その点を明らかにしたい。

2) 大学生生活の満足度

前述したように、神戸山手大学のシニア学生は、仕事を定年退職されてから進学された方が大半であり、現在の職業にかかわる専門知識・技能を習得するといった実務的な必要性を学びの目的とされている方は少ない。そういった状況で、シニア学生は学びについての満足感をどのように得ているのだろうか。また大学で学ぶことで、生活全般の満足度は向上しているのだろうか。大学に入学してよかったという思いがあるならば、それは大学生生活のどのような点から得られたものなのだろうか。

また、大学に通うということは、単に知識を増やすことだけにとどまらない。そこに生まれるシニア学生同士、またシニア学生と若い学生の交流などは、生活満足度にどのような影響を与えているのだろうか。こうした点を明らかにしていきたい。

4 調査の概要

上記の研究の視点をもとに、実際にシニア学生を対象に聞き取り調査を行った。調査の概要は以下のとおりである。

神戸山手大学シニア学生（卒業生を含む）に対する聞き取り調査

調査時期： 2013年8月（聞き取りをおこなった者；行木敬、飯嶋香織）

対象人数： 5名

表1 5名の内訳

		性別	年代	入学前の状況（卒業後の状況）
卒業生（1期生）	Aさん	男性	60歳代	会社員 定年退職後入学 （「住まい・環境相談室」主宰）※
卒業生（1期生）	Bさん	女性	60歳代	公務員 定年退職後入学 （「住まい・環境相談室」主宰）※
在学生（4年）	Cさん	女性	60歳代	会社員 定年退職後入学
在学生（4年）	Dさん	女性	60歳代	会社員 定年退職後入学
在学生（3年）	Eさん	男性	60歳代	会社員 定年退職後入学

※ 2013年9月現在

※ 神戸山手大学のシニア第1期卒業生AさんとBさんは、神戸山手大学で学んだことをもとに社会に役立ちたい、地域社会に貢献したいという思いから、シニアの目線で住まい・環境など幅広い相談を受ける「住まい・環境相談室」を立ち上げた。この事業は、兵庫県から「平成24年度 高齢者生活支援ビジ

ネス離陸応援事業」として選定されている。また、新聞でも紹介された。(神戸新聞 2013年3月9日 (土) 朝刊 22面 地域ニュース面 「同世代の視点からサポート／高齢者の「住」相談室／神戸山手大 シニア学生 OB が開設」)

5 調査の結果と考察

1) 入学の動機や経緯など

神戸山手大学を志望した動機や入学の経緯についての聞き取り結果を以下にまとめる。

どの方も、基本的に学ぶことへの意欲や興味を強く抱いてきたことが共通している。

進学への阻害要因となる年齢や健康に関する不安は、少なくとも本学のシニア学生に関しては、より強い学びへの意欲や興味によって先送りにされてしまったような印象がある。「先送り」という言い方が適切なかはわからないが、実際、年齢や健康に関する不安は、考え込んでいても解消されるものではない。不安はあっても、思いきって挑戦してみる他ないし、実際そうされた方が、いま本学の学生になられているということなのだろう。

また、本学への進学を家族から勧められたという方が多かったのも興味深い。シニア層が大学進学の意志を抱く時、家族の存在は障壁になるのではなく、むしろ支援になるということだろうか。実際に家族の理解があって進学することができた本学のシニア学生からの聞き取りだけではそれ以上のことはわからないが、ともあれ年齢や健康の不安をクリアーし、進学に踏み出す上では、こうした家族の支援も大きな役割を果たしたことは間違いない。

ただし、本学に通ううち、やはり年齢や健康の壁にぶつかられた方も、残念ながら過去にいたことを付記しておかねばならない。特に年齢の問題は、本人だけではなく「家族の介護」という形で表面化することがある。第1期生は13名の入学者があったが、健康上の理由や家族の介護などで休学者や退学者があり、4年間で卒業できたのは11名であった。他の学年でも、入学後に健康問題や家族の介護、進路変更(中途での大学院への進学)などから、学業を中断するシニア学生がいる。

他に進学を決断した理由としては、本学の奨学金制度や、大学の立地の良さ^(注2)を挙げる方が多かった。年40万円相当の返済不要の奨学金は、経済的な阻害要因をクリアーするのに大きな後押しとなっていることが確認できる。

注2 神戸山手大学は神戸市の中心である三宮から徒歩15分、元町から徒歩10分に位置している。

大阪の「シニア自然大学」という生涯学習のNPOに参加していたが、定年退職後、週二回の自然大学だけでは時間を持て余していた頃、妻が神戸山手大の新聞広告を見つけてきてくれ、入学を勧めてくれた。(Aさん)

仕事をしていたときに、働く人たちにとってはやさしいとはいえない建物の造りなどについて疑問を持っていた。定年退職が近づいた頃、電車の広告で、神戸山手大学がちょうどシニアの受け入れをはじめたことを知り、しかも住環境について学べるコースがあるということで入学を考えた。定年退職した

からといってぼんやりとせず、何かを学び考え続けたい、そういう気持ちもあった。

奨学金制度があることも、この大学への進学を決めた理由だった。奨学金が出る50歳になるのを待って、ここに来た人もいる。この大学は立地もよい。(Bさん)

退職が決まり、会社で必要だった知識以外のこと、環境問題などを一から勉強したくなった。神戸山手大学では環境分野が学べること、シニア学生にかなりの奨学金が出ることも知り、ここに行こう、そう決意した。(Cさん)

退職後にさあ自由だ、遊ぼうと思ひ、旅行に行ったり、友達と出かけたりした。最初の1回2回は楽しかった。しかし、こんな生活はすぐに飽きてしまうような気もした。何をしたから良いかと考えていたとき子どもが大学のパンフレットを持ってきて入れて入学を決断した。

奨学金がでることも後押しになった。これだけの学費で4年間みっちり学ばせてくれるなら安いものだ、という気持ち。(Dさん)

この大学を選んだのは、若い学生と同じように学べるから。シニア向け講座のようなものではなく、大学生としてフルに学べる大学というのは他にはなかったからである。シニア向け講座のようなものは念頭になかった。学ぶならば本格的に基礎から全てを学ぶべきだと思った。ある程度厳しくないと思ひ、怠けてしまうかもしれないと思ひた。

高度経済成長期の真ただ中、大学に行きたいと思ひていたが、経済的な事情からあきらめ、会社に就職した。最終的に管理職になったが、しかしあの時大学に行っていれば、という思ひはずっと消えなかった。定年が近くなってきたころ、妻がネットでこの大学のこゝを見つけてくれた。2年後、定年を待って受験。合格し、退職と同時に入学した。(Eさん)

以上5名の方たちは、「大学生としてフルに学べる大学」である故に、つまり前述の「分離型」ではなく「統合型」の大学である故に、神戸山手大学を選んだという点で共通している。これは、週1、2回のシニア講座のような学びのスタイルでは得られないような学びの充実感が、統合型のシニア教育にはある、あるいはあると期待されていることを意味している。

学びがもたらす充実感へのこうした期待が、シニア学生に共通する志望動機である。専攻したい分野が入学前から明確だった方はもちろん、そうでない方であってもこれは同じである。すなわち、学ぶことそれ自体を目的と考へ、そこに充実感を見出そうとする傾向がシニア学生には指摘できる。自発的な学習意欲、つまり学んだことを手掛かりにさらに視野を広げていくような学習態度がシニア学生に顕著なのは、進学理由の根本にこうした傾向があるからだろう。

Eさんのように、高校卒業時には経済的理由その他であきらめた大学進学を、定年退職した今かなえたという方も本学のシニア学生には多い。すなわちシニアの志望動機として、学びも含めた大学生活全般への期待というものも大きいことがうかがえる。

また、聞き取りをおこなうまで、われわれは、シニアになってからの大学進学は家族の理解を得ることが大きな障壁になると考へ、その上で研究の見込みを立てていた。すなわち年齢や健康での心配を口にする家族に対し、それを説得し、理解を得ていった過程が聞き取れば、そこにこそシニアの大学進学にとまなう阻害要因をクリアしていく過程が読み取れるだろうと考へていたのである。ところが実際に話をうかがってみると、大学進学に際しての家族の説得には特に苦勞をしな

かったという方が大半であった。それどころか、家族が本学の存在を見つけ、進学を勧めてくれたという方も多かった。

家族の理解に苦労しなかった理由として、ある女性のシニア学生は「これまでフルタイムで働いてきて、仕事と家事を両立させてきた。行先が職場から大学に変わったところで、家族にとっては大きな違いはなかったからではないか」という分析を語っていた。またどの方も、大学進学を考える前から市民講座に通うなど、学びに対する関心や意欲を強く持っていたことがうかがえる。そうした日頃の様子をみることで、家族の側にも、学びへの理解が、ゆっくりと自然な形で形成されていったのではないかと思われる。

このようにシニア層が大学進学の意志を抱く時、家族の存在は障壁になるのではなくむしろ支援になっている可能性が、今回のインタビューからはうかがいあがってきた。年齢や健康といった阻害要因をクリアーできたのは、本人の学びへの意欲に加え、こうした家族の支援も大きいと思われる。この点については、逆に大学進学をあきらめてしまったシニアへの調査なども含め、今後の課題としたい。

2) シニア学生にとっての大学での学びとは

大学入学後のシニア学生が、大学での学びについてどのように感じているのかについての聞きとり結果は以下の通りである。大学での学びを通して学問の広がりを感じ、さらに学ぶ意欲が高まっている点が非常に印象的である。

自分の関心外だった授業も、履修してみると色んなことに気づかされて、すごく視野が広がる。週一の講座にいくだけでは、知識や視野はこんなには広がらなかったはず。そこが大学に来て本当によかったところ。(Bさん)

遊びの楽しさはやがて飽きに来るけど、勉強は知れば知るほど、さらにその先が知りたくなる。実際、学べば学ぶほどまだ知らなかったことがたくさん出てきて、非常に面白い。若い頃通った大学では、試験さえ通ればいいやと聞き流していた勉強も、いま再び大学生になってみると、勉強ってこんなに面白かったのかと思う。休むのがもったいない。(Cさん)

勉強には、何かをやり遂げたという充実感がある。そしてその先に、自分の研究テーマというものが見えてくる。私の今の研究テーマは「環境と雇用」です。いま論文としてまとめかけています。(Dさん)

いろいろな種類の授業があり、その中から自分の関心のある授業だけを選べるという大学の仕組みがよかったのかも。私はとにかく環境関連、建築関連の授業だけを集中的に履修した。

また、分からないことはどうやって調べればいいのか、どう考えてどうまとめればいいのか、そのやり方が大学で身についたことは大きい。卒業した後も、それは自分の人生に大きなプラスを与えてくれている。とにかく大学は忙しいけど面白かった。そういう私の姿をみて「来年神戸山手のシニアを受けようか」といっている人がいるほど。(Aさん)

若い学生は「就職のために資格をとる」といった切実な目標があるが、シニア学生は、その点ではそこまで切実ではない。しかし、好きなことだけ学んで、後の授業はどうでもいいのかという態度でもない。

それならシニア向け講座のようなもので十分。わざわざ大学に来たのは、自分の関心を、その周囲や裾野から全体的に学びたいから。

どんな授業もおろそかにはしないのは、シニア学生同士での競争心もあるのかもしれないし、さらに自分でお金を払っているという意識があるからかもしれない。しかし一番大きいのは、どんな授業でも受けてみると面白さがみつかってくるからだと思う。(Eさん)

上記のことから共通して言えることは、週1, 2回のシニア講座のような学びのスタイルからは得られないであろう大学での学問の広がりを実感し、大学生として大学生活にコミットメントをすることから得られる充足感や満足感を感じていることである。「自分の関心外だった授業も、履修してみると色んなことに気づかされて、すごく視野が広がる」「周囲や裾野から全体的に学びたい」などのように、シニア学生は、単発の講座では得られない学びを求め、それを大学で得ている。神戸山手大学に入学を希望した学生は、学びの充実感を求め、それについては大学での学びに満足しているといえよう。

大学の学びを通して、さらに学ぶ意欲が高まるという好循環も生じている。「勉強は知れば知るほど、さらにその先が知りたくなる」「どんな授業でも受けてみると面白さがみつかってくる」「勉強には、何かをやり遂げたという充実感がある。そしてその先に、自分の研究テーマというものが見えてくる」など、神戸山手大学に入学しているシニア学生は学ぶこと、知ることを楽しみつつ充実した学びであるという点に非常に満足を感じているようである。

3) 大学で広がる人間関係

大学生活全般についての聞き取りの結果は以下の通りである。同じシニア学生同士で遊びに行ったり、若い一般学生と一緒にクラブ活動に参加したりするなど、大学生活を積極的に楽しんでいるシニア学生の姿が浮き彫りになった。

大学生活全般についての聞きとりの結果は以下の通りである。若い一般学生と一緒にクラブ活動に参加するなど、大学生活を積極的に楽しんでいるシニア学生の姿が浮き彫りになった。

いろいろな人生を歩んできた人がここに集まって、だから互いに負けられない、という気持ちになりました。もちろんすぐに仲良くなりました。(Aさん)

まずは友人。いろいろな人生を歩んできた方が集まっているのがシニア。今までの自分の交友範囲にいなかったような人ともつながりができていくのは、とても刺激的だった。(Bさん)

同じシニア学生で映画を見に行ったり、食事に行ったり、楽しんでいます(Cさん)

それまでしてきた仕事も違う、住んでいる場所も違う、普通なら接点のなかったはずの人たちと知り合えるのは、大学ならではの(Dさん)

クラブ活動は華道部に入った。部長をやっている若い学生と知り合いで入ったのだが、やってみると面白い。若い学生も、シニア学生も、みんなでワイワイやっている。(Eさん)

このようにシニア学生は、大学という場でなければ会うことのなかったような様々な経歴の人たち、様々な年齢の人たちとの交流を、積極的に楽しんでいる様子がかがえる。学びだけではなく、人間関係についても、シニア学生たちは積極的な参加姿勢を持ち、豊かな大学生活を実現されているようである。

こうした人間関係の広がり、正規学生として毎日大学に通い、たくさんの学生と触れ合いながら学生生活を送ることで生み出されている。すなわち、シニア受入れに関する本学のような統合型の学習環境は、学びを深めるだけでなく、人間関係の広がりにも大きな意義を持っているということである。

6 まとめと今後の課題

1) まとめ

今回お話をうかがったのは、週1、2回のシニア講座のような「分離型」の大学ではなく、大学生としてフルに学べる「統合型」の大学への進学を選択したシニアの方々である。彼らに顕著なのは、学ぶことそれ自体を目的と考え、そこに充実感を見出そうとする傾向であった。この傾向は、本学に入学後、単発の講座ではみえてこない学問の広がりを実感し、さらに学ぶ意欲が高まるという好循環を生み出していた。シニアになってから大学に通うことで生まれるこの学びの好循環は、生活満足度の向上に、大きな役割を果たしていると考えられる。

年齢や健康への不安といった進学への阻害要因は、本人の学問への関心や意欲によって、また家族の支援によってクリアされていた。家族の存在は、大学進学への障壁ではなく、むしろ支援になるというのは、今回の聞き取りで認識を新たにさせられたところであった。

また、神戸山手大学の返済不要の奨学金制度や、立地の良さ、通いやすさも、大学進学を決意させた要因となっていることが再確認された。

大学に通うということは、学び以外にも、そこでしか出会えないような様々な経歴の人たち、様々な年齢の人たちとの交流を生み出す。そうした人間関係の面でも、シニア学生たちは積極的な参加姿勢を持ち、豊かな大学生活を実現されていた。

本学のシニア学生が、学びの面でも人間関係の面でも大きな充実感を得ているならば、それはおそらく、一般学生と一緒に、同じようにフルに学ぶことのできる「統合型」の学習環境ゆえといえそうである。

2) 今後の課題

本研究はシニア学生5名を対象に聞き取り調査を実施した。今後、卒業生、在校生全員を対象に質問紙調査を実施し、神戸山手大学のシニア学生の全体像の把握を行いたいと考えている。

また、視点は少し異なるが、シニア学生と若い学生がともに学ぶことは若い学生にとっても大きな意味を持っている。神戸山手大学に在籍する留学生を含めた多様な学生に対して、シニア学生は

授業、ゼミ、クラブ活動などさまざまな教育活動の中で支援をしてきている。社会経験のあるシニア世代と若い世代がともに学ぶことは、若い学生の立場からも大きな意味がある。シニア学生自身は、そういった点についてどのように考え、行動をしているのかを明らかにすること、また若い学生からみたシニア学生の評価も今後の検討を要する課題と考えている。

神戸山手大学シニア50+制度がはじまり、すでに2期の卒業生を輩出している。今回は触れなかったが、シニア学生が学んだ成果をいかすことをどのように考えているか、また、実際にどのような活動をしようとしているか、実際の活動状況をあきらかにすることも重要な課題である。

今後も50才以上のシニア学生に神戸山手大学を選択してもらうためには、在学中の学びの充実だけでなく、卒業後、学んだことを社会で生かすことが出来るような道筋を考えておく必要があるだろう。

大学を選択する立場のシニア学生の要望に応え、今後もよりシニア学生にとって魅力的な大学であり続けることが必要である。そのためには、シニア学生向けのカリキュラム開発などの必要性や、卒業後の社会貢献への支援などを大学が何らかのかたちで提供できることなどの検討が求められているといえよう。

引用文献

- 佐藤真一, 2006「団塊世代の退職と生きがい」(特集「2007年問題」を検証する)日本労働研究雑誌 48(5)
- 出相康裕, 2004「学部段階への社会人入学の現状に関する一考察:大学の属性の影響力の視点から」大阪教育大学紀要 II, 社会科学・生活科学 53(1), 39-50
- 出相康裕, 2009「市民大学受講者の大学への入学志願に対する阻害要因—大阪府内における受講者調査から—」大阪教育大学紀要 第4部門 教育科学 57(2), 123-135
- 福原栄太郎, 2008「神戸山手大学シニア50+(フィフティプラス)入学制度への取りくみ」神戸山手大学紀要 第11号
- 堀 薫夫, 2011「シニア層向け大学開放に関する一考察」大阪教育大学紀要 第IV部門 第59巻 第2号
- 三徳和子, 高橋俊彦, 星旦二, 2006「高齢者の健康関連要因と主観的健康感」川崎医療福祉学会誌, VOL.15 NO.2
- 文部科学省(超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会), 2012『長寿社会における生涯学習の在り方について～人生100年いくつになっても学ぶ幸せ「幸齢社会」～』